

【記録】インタビュー 2015年4月30日（木）15：45～

於：ラビスタ釧路川

○畠山京子さん 釧路消費者協会 会長

### ○訪問の背景

2006年11月～2007年2月に、北海道と CoSTEP（北海道大学科学コミュニケーター養成ユニット）及び GM 作物対話フォーラム PJ（JST/RISTEX の助成；吉田が参加）の三者による「北海道 GM コンセンサス会議」が開催されました。畠山さんは公募の道民委員として、吉田は同会議の実行委員会事務局次長として関わりました。また、畠山さんには同年3月17日に、上記 PJ 主催「遺伝子組換え作物を考えるプレ円卓会議」のステークホルダー対話にご出席いただきました。

### ○訪問の目的

1. リスクミ職能教育プロジェクトの説明と緩やか連携の依頼
2. GM 作物及び新しい育種技術 NBT に対するスタンスを伺う
3. リスクコミュニケーションについて言っておきたいこと

### <GM 作物や NBT に対する考え方・スタンス>

コンセンサス会議で深い議論ができたのは、既に登場して論争中だった GM 作物について参加者一同に何がしかの知識が予めあったからです。NBT は多くの一般消費者にとっては聞いたこともない話で、1・2回の専門家レクチャーを受けただけの議論では、同会議の市民提案のようなものは出せないと思います。

新しい科学技術に関しては、人の命に係わる研究の場合はゆっくりやってもいられないでしょうが、食べるという一般の人が関係することでは、時間がかかっても社会の合意を得るようにして進んでいくべきだと思います。NBT に関しては、研究開発者が知識のあるステークホルダーとだけ対話を行い、道筋をつけた所で一般消費者に状況を示すというやり方をとるだけなら、BSE リスクミと同じではないでしょうか。それは傲慢だと思います。

研究者が自分たちのやっていることを、良いんだ、と決めつけていること自体が、私達にとっては拒否反応のもとなのです。往年のリスクミは私たちに説得するためのものだという雰囲気があり、リスクミ・アレルギーに繋がったと思います。しかし、学習を重ね専門家と話せるようになると、リスクミはあった方がいいなと思うようにもなりました。

### <リスクミ能力を考える上で、忘れられない体験>

ずいぶん前になりますが、日本学術会議の関連で、釧路市内で遺伝子組換え作物に関する会合がもたれた時、消費者の立場で話してもらいたいということで、北大の先生方も多数おられる前で「GM、ノー」と話したことがあります。質疑応答の際に、呆れた体験をしました。（γ線）照射で誕生したイネのことを話されて「(GM ノーっていうけれど) じゃあ照射はどうなるのよ」と言われました。これは問題のすり替えだと思いました。科学者の方が問題をすり替えて、しかもイライラしながら言うわけです。これはリスクコミュニケーション能力がない、ということになるのではないのでしょうか。

◇後記◇ （インタビュアー：吉田省子 北海道大学大学院農学研究院客員准教授）

説得ではないリスクコミュニケーションを求めるといことで、我々の考え方とも重なりました。また、NBT に関しては、専門家同士の議論や専門家とステークホルダーが問題を把握しながら行っていく対話と、専門家と消費者の相互信頼を深めるためにも行う両者間の継続的な学習会や対話、この二段三段構えが必要だと確認しあいました。